

FIM からみた回復期リハビリテーション病棟における転倒の危険性

稲次整形外科病院リハビリテーション科

稲次美樹子、稲次正敬

徳島大学医学部歯学部附属病院理学療法部

高田信二郎

【はじめに】

本研究は、回復期リハビリテーション病棟における転倒の実態調査を行ない、FIM からみた転倒の予測因子の検索を行うものである。

【方法】

対象は、回復期リハビリテーション病棟で入院加療を受けた 32 例であり、男性 13 例、女性 18 例、年齢は 29～91 歳（平均年齢は 69.6 ± 12.9 歳）であった。リハビリテーションは、脳血管疾患等リハビリテーションが 20 例、運動器リハビリテーションは 12 例であった。

転倒回数は、回復期リハビリテーション病棟入院中の 3 か月間において転倒回数を調査した。転倒した者は 11 名、転倒しなかった者は 21 例であった。これらを各々転倒群と非転倒群とした。

運動機能は、機能的自立度評価法 functional independence measure (FIM) を用いた。FIM は、入院時は 88.2 ± 20.9 点であったが、退院時には 115.1 ± 15.5 点まで改善していた。

転倒群と非転倒群との間の有意差検定は、対応の無い t 検定を用いた。また、転倒群および非転倒群の FIM の変化についての統計学的検討は対応のある t 検定を用いた。いずれの統計解析についても、その有意水準を 5% とした。

【結果】

年齢は、転倒群は 70.5 ± 10.4 歳、非転倒群は 67.5 ± 17.4 歳であり、有意な差はなかった ($p=0.5513$)。

転倒回数は 1～5 回であり、平均 2.4 ± 1.2 回であった。

入院時 FIM は転倒群は 75.7 ± 18.6 点、非転倒群は 95.1 ± 19.3 点と、転倒群は非転倒群に比べて入院時 FIM は有意に低値であった ($p=0.0113$)。退院時 FIM では、転倒群は 112.3 ± 17.2 点、非転倒群は 116.7 ± 14.7 点であり、2 群において有意な差がなかった ($p=0.4554$)。

入院時と退院時の FIM を比較すると、転倒群では入院時 FIM が 75.7 ± 18.6

であったが、退院時には 112.3 ± 17.2 点まで改善した ($p < 0.0001$)。非転倒群では、入院時 FIM は 95.1 ± 19.3 点であったが、退院時には 116.7 ± 14.7 点まで増加した ($p < 0.0001$)。

【考察と結論】

本研究は、回復期リハビリテーション病棟で転倒した患者は、転倒しなかった患者に比べて退院時における FIM には差がないものの、入院時 FIM が低値であることを明らかにした。転倒した患者における退院時 FIM に視点を移せば、転倒した患者においても、転倒しなかった患者のレベルまで FIM が回復することも示している。今後、回復期リハビリテーション病棟を退院した患者において、転倒群および非転倒群の FIM の経時的変化と転倒回数との間の関わりを解明したい。